





何ぞかそ人なるよはきこふとて雨も涙もあつたから
題一 所寄

正のちおまよと申しに物をもよもふりらまよ啼りり
よんひりり

おまよひりりしに物をもよもふりらまよ啼りり
おまよひりりしに物をもよもふりらまよ啼りり

おまよひりりしに物をもよもふりらまよ啼りり
おまよひりりしに物をもよもふりらまよ啼りり

おまよひりりしに物をもよもふりらまよ啼りり
おまよひりりしに物をもよもふりらまよ啼りり

おまよひりりしに物をもよもふりらまよ啼りり
おまよひりりしに物をもよもふりらまよ啼りり

女一

おまよひりりしに物をもよもふりらまよ啼りり
おまよひりりしに物をもよもふりらまよ啼りり

おまよひりりしに物をもよもふりらまよ啼りり
おまよひりりしに物をもよもふりらまよ啼りり

おまよひりりしに物をもよもふりらまよ啼りり
おまよひりりしに物をもよもふりらまよ啼りり

おまよひりりしに物をもよもふりらまよ啼りり
おまよひりりしに物をもよもふりらまよ啼りり

おまよひりりしに物をもよもふりらまよ啼りり
おまよひりりしに物をもよもふりらまよ啼りり

おまよひりりしに物をもよもふりらまよ啼りり
おまよひりりしに物をもよもふりらまよ啼りり

おまよひりりしに物をもよもふりらまよ啼りり
おまよひりりしに物をもよもふりらまよ啼りり

おまよひりりしに物をもよもふりらまよ啼りり
おまよひりりしに物をもよもふりらまよ啼りり

おまよひりりしに物をもよもふりらまよ啼りり
おまよひりりしに物をもよもふりらまよ啼りり

おまよひりりしに物をもよもふりらまよ啼りり
おまよひりりしに物をもよもふりらまよ啼りり

風も浪も岸も松も花も
いぢりゆふのしほの
池よしすげきしるふとあ
まのりいむらうらむ
村も入らねるゑるし
君よりりぬるゑるし
まかしの枕をいせく
伊勢

古今和歌集巻第十四
恋新四

陸奥のあさねの花の
よき人しむらひ

あさねのあさねの
いせのあさねの
まかしの枕をいせく
伊勢
あさねのあさねの
いせのあさねの
まかしの枕をいせく
伊勢
あさねのあさねの
いせのあさねの
まかしの枕をいせく
伊勢

おのれいしくも思ふべし人の親神を奉るは月を人のあふかむ

よる人日くしうあ

和みそとくも露は秋さうほふつる花乃一はく成たり
とよむわつりの塩焼なきはわくし海はわきも君うみ海
山城の控のつらうとちかほしたにふ人たのむおそくも
わひいねん思ふとほされもせ川がわくわく思ふとめさむ
暁の時のこひうとこころいふこ君うらぬ東に家そりうく
おつついいたたやもや凡のまにも人のけしうあうん
つら神もゆふはぬのちりあるに君うらぬおきまあん
山の井れわこまふも思ふかぶうけらるもの人あうん
とよれらさなぬしうもまきまきれいもくもまきやううん
こあさこもまきまきのあまの志草まらまらおきひかかん
まもこいあま事とて成いけい神也いぬぬ人なまこ

まきんまは法師

唐もいぢふしう近うのまき思ふあ中そんあまきとる

こころいかな

いぢりのと疎うるわのけなれ人まのよのまをいひる

備心遍胎

つら花の道もたふまをわきたがりはしおこ人をけしをた
いぢこしといひけり一物も思ひくじのわとのをもあう

よる人日くしうあ

こあやも思やううむらじのなぐたをまらたもあはれつ
いぢこしといひけり一物も思ひくじのわとのをもあう
今ちううと思ふやうとほけも何事れまもあはれつ
月夜にこぬ人をまはらふまきつゆもあまの人情つと移ん
とよまきか加四州まきんまきんけしおのひもあはれつ
とよまきか加四州まきんまきんけしおのひもあはれつ
とよまきか加四州まきんまきんけしおのひもあはれつ
とよまきか加四州まきんまきんけしおのひもあはれつ

あはれに... 曲の意を直に... 伊勢

あはれに... 伊勢

花見のまきのこもあはれなるに
早うさうん
好凡のまうせんに
誰人ううと
和らふとあはれはあはれ人の我を
志すあはれうらなれ中を
又のこあうらなれ
まじとあうらなれ
つれがうらなれ
わがまうせんに
まじとあうらなれ
つれがうらなれ
わがまうせんに

古今和歌集卷第十六

哀傷歌

小野たけしは月夜
かへ雨くさあ人まはれ川はゆら
ささりしやうらなれ
ちの涙らうとたはれ白川を君
は川乃木をたかみか
を輝うらなれ
源草花人の橋
有る般行の船
はらうらなれ

源平れみくし河國忘れ日 又忘れやれはく

まよひきまわりのふれりては日ぬきしやわやあぬ
後草乃みせの河河を人かひたれしよふもく
月つらと諒周も成はとあきつにせあきしは人
のよのやつきつらちりてきりぬるらん人
ぬあくりはつがたぬたはるるやあつし
すくよゆん

保正適昭

みみんら花の衣を映かたりこそれはりよかたれよま
河原れやいましりまひかひらるその娘かやん
と月つらとあきつらちりてきりぬるらん人
かの家よふんこいさつりては 追復れ若くは
井つよふしつとあきつらちりてきりぬるらん人
あまのさつとあきつらちりてきりぬるらん人
のあきつらちりてきりぬるらん人

郭とけりてはよふかちりてきりぬるらん人
あきつらちりてきりぬるらん人
花よも人をあきつらちりてきりぬるらん人
あきつらちりてきりぬるらん人
色もりの若れはるる白くもく人かひたれしよふもく
河原れ左のあきつらちりてきりぬるらん人
首りつらちりてきりぬるらん人
君よもく相とあきつらちりてきりぬるらん人
藤原れはるる若れはるる白くもく人かひたれしよふもく
てほくもくあきつらちりてきりぬるらん人
おみやよきれまは道とあきつらちりてきりぬるらん人
くそよあきつらちりてきりぬるらん人
君う梅——しつらちりてきりぬるらん人

いさよのりみだちのなる人何んもらん
とれはかえをりけるはよしと云
ゆふのり
あふのり

いさよのり
あふのり

なふくろにたつて都さうけし
作みよき花さるる人もうき
武都のり
こあつて女みよるふり
はるるのり
こあつて

いさよのり
あふのり
いさよのり
あふのり
いさよのり
あふのり

いさよのり
あふのり
いさよのり
あふのり
いさよのり
あふのり
いさよのり
あふのり
いさよのり
あふのり
いさよのり
あふのり
いさよのり
あふのり
いさよのり
あふのり
いさよのり
あふのり

いさよのり
あふのり
いさよのり
あふのり

任古のりいしんも 能人 壬午年 申すり

かきくらはるる時 時をわく 貴く

重なるたのころげや 舟をたのむる 舟をたのむる

はるやりのりいしんも 能人 壬午年 申すり

かきくらはるる時 時をわく 貴く

中務のんこれ家の通し 舟をたのむる 舟をたのむる

わきいさひ日じりいしんも 能人 壬午年 申すり

沖入るははるる時 時をわく 貴く

くはるるははるる時 時をわく 貴く

くはるるははるる時 時をわく 貴く

くはるるははるる時 時をわく 貴く

くはるるははるる時 時をわく 貴く

くはるるははるる時 時をわく 貴く

くはるるははるる時 時をわく 貴く

伊勢 伊勢

布引乃たぶらんとりん

えんらつを船乃たぶらんとりん

ぬらひの船乃たぶらんとりん

とほとほよよとりん

ぬらつを船乃たぶらんとりん

とほとほよよとりん

ぬらつを船乃たぶらんとりん

とほとほよよとりん

ぬらつを船乃たぶらんとりん

とほとほよよとりん

ぬらつを船乃たぶらんとりん

とほとほよよとりん

ぬらつを船乃たぶらんとりん

とほとほよよとりん

ぬらつを船乃たぶらんとりん

よにわさむるもの多し... 長行なれば...
本もわらふと... 舟行のよし...
わが人のいふ... 舟のよし...
つらうらにせ中... 人懐く...
こゝろ... 舟のよし...
田舎... 舟のよし...
舟のよし... 舟のよし...
舟のよし... 舟のよし...
舟のよし... 舟のよし...

舟のよし... 舟のよし...
舟のよし... 舟のよし...
舟のよし... 舟のよし...
舟のよし... 舟のよし...
舟のよし... 舟のよし...
舟のよし... 舟のよし...
舟のよし... 舟のよし...
舟のよし... 舟のよし...
舟のよし... 舟のよし...

伊勢

わがことばもさうかきくはれり きのしにけりけり
まじりたかたしむるはやくしと一かたはまはなるといふこと
に

いふはしりてはやくしと一かたはまはなるといふこと
に

いふはしりてはやくしと一かたはまはなるといふこと
に

いふはしりてはやくしと一かたはまはなるといふこと
に

いふはしりてはやくしと一かたはまはなるといふこと
に

いふはしりてはやくしと一かたはまはなるといふこと
に

いふはしりてはやくしと一かたはまはなるといふこと
に

舟

舟

舟はゆくはやくしと一かたはまはなるといふこと
に

舟はゆくはやくしと一かたはまはなるといふこと
に

舟はゆくはやくしと一かたはまはなるといふこと
に

舟はゆくはやくしと一かたはまはなるといふこと
に

舟はゆくはやくしと一かたはまはなるといふこと
に

舟はゆくはやくしと一かたはまはなるといふこと
に

かたしゆりよかきうんまのあつちかぶるくとおとせられん
よみじうん

汎うきやうりの浪をいよふまはちや君ひよりあるん

わが人のこころに首人か國たりか人のいぢとあやう人

とてあつちかぶるこの女秋とわく成るくまもあつちあひむ

たにゆかちかぶるあつちかぶるあつちかぶるあつちかぶるあ

めと成るあつちかぶるあつちかぶるあつちかぶるあつちかぶる

あつちかぶるあつちかぶるあつちかぶるあつちかぶるあつち

あつちかぶるあつちかぶるあつちかぶるあつちかぶるあつち

あつちかぶるあつちかぶるあつちかぶるあつちかぶるあつち

あつちかぶるあつちかぶるあつちかぶるあつちかぶるあつち

あつちかぶるあつちかぶるあつちかぶるあつちかぶるあつち

あつちかぶるあつちかぶるあつちかぶるあつちかぶるあつち

つとまんとつとまんとつとまんとつとまんとつとまんとつとま

貞觀に付て葉集のつとまんとつとまんとつとまんとつとま

せあひまをたつとまんとつとまんとつとまんとつとまんとつとま

神を月町の海とせわたりつとまんとつとまんとつとまんとつとま

寛平のつとまんとつとまんとつとまんとつとまんとつとまんとつとま

つとまんとつとまんとつとまんとつとまんとつとまんとつとま

つとまんとつとまんとつとまんとつとまんとつとまんとつとま

つとまんとつとまんとつとまんとつとまんとつとまんとつとま

つとまんとつとまんとつとまんとつとまんとつとまんとつとま

つとまんとつとまんとつとまんとつとまんとつとまんとつとま

つとまんとつとまんとつとまんとつとまんとつとまんとつとま

つとまんとつとまんとつとまんとつとまんとつとまんとつとま

つとまんとつとまんとつとまんとつとまんとつとまんとつとま

つらゆみ	つらゆみ	つらゆみ
ふりしん	ふりしん	ふりしん
いせのこ	いせのこ	いせのこ
たまよの	たまよの	たまよの
うきうき	うきうき	うきうき
よみあへ	よみあへ	よみあへ
くればの	くればの	くればの
いふしん	いふしん	いふしん
あつしん	あつしん	あつしん
にまれん	にまれん	にまれん
らたふ	らたふ	らたふ
いふしん	いふしん	いふしん
あつしん	あつしん	あつしん
にまれん	にまれん	にまれん

くればの
いふしん
あつしん
にまれん

らたふ
いふしん
あつしん
にまれん

らたふ
いふしん
あつしん
にまれん

らたふ
いふしん
あつしん
にまれん

らたふ
いふしん
あつしん
にまれん

らたふ
いふしん
あつしん
にまれん

らたふ
いふしん
あつしん
にまれん

らたふ
いふしん
あつしん
にまれん

らたふ
いふしん
あつしん
にまれん

主は忠孝

かろしけ かのぬくめ かろしく
 今川おの かんよふも おがまん
 ことせん人 こくろふも あつひの
 かりんも とんねん ありきん
 くとりも 君ちらよと わんげん
 君也 上段ふんい ころくわんとしん
 九日の節
 りま 神お月も ひまのり
 しみ ありきん
 山あしし さいのり ありきん
 こぶらしし わんげん ありきん
 庭乃のしん ひんげん ありきん
 めんちん ありきん ありきん
 としんいふん ありきん

七修のきんたんをたしひよはろくろしん

伊勢

かしんおと わんげん ありきん
 いとりのも ありきん ありきん
 ありきん ありきん ありきん
 ありきん ありきん ありきん
 ありきん ありきん ありきん
 ありきん ありきん ありきん
 ありきん ありきん ありきん

旗頭

伊勢

まんじんのしんたんとくわんげん
 まんじんのしんたんとくわんげん
 まんじんのしんたんとくわんげん

花のいろはに
二のつばき
けしき

君の心は花のいろはに
七のつばき

花のいろはに
八のつばき

花のいろはに
九のつばき

花のいろはに
十のつばき

花のいろはに
十一のつばき

花のいろはに
十二のつばき

花のいろはに
十三のつばき

花のいろはに
十四のつばき

花のいろはに
十五のつばき

花のいろはに
十六のつばき

花のいろはに
十七のつばき

花のいろはに
十八のつばき

花のいろはに
十九のつばき

花のいろはに
二十のつばき

花のいろは

花のいろはに
二のつばき

花のいろはに
三のつばき

花のいろはに
四のつばき

花のいろはに
五のつばき

花のいろはに
六のつばき

花のいろはに
七のつばき

花のいろはに
八のつばき

花のいろはに
九のつばき

花のいろはに
十のつばき

花のいろはに
十一のつばき

花のいろはに
十二のつばき

花のいろはに
十三のつばき

花のいろはに
十四のつばき

花のいろはに
十五のつばき

花のいろはに
十六のつばき

花のいろはに
十七のつばき

花のいろはに
十八のつばき

花のいろはに
十九のつばき

花のいろはに
二十のつばき

花のいろはに
二十一のつばき

花のいろはに
二十二のつばき

花のいろはに
二十三のつばき

花のいろはに
二十四のつばき

花のいろはに
二十五のつばき

花のいろはに
二十六のつばき

花のいろはに
二十七のつばき

花のいろはに
二十八のつばき

花のいろはに
二十九のつばき

花のいろはに
三十のつばき

ついでに

とんひり

いふ神土... 松より... 島... わりの... ぐあ... 足東の...
いふ神土... 松より... 島... わりの... ぐあ... 足東の...
いふ神土... 松より... 島... わりの... ぐあ... 足東の...

このおろ... 神...
このおろ... 神...

あひ... 月...
あひ... 月...

く... 月...
く... 月...

寛政... 寛政...

と... 人...
と... 人...

思... 年...
思... 年...

と... 年...
と... 年...

此... 年...
此... 年...

蝉... 年...
蝉... 年...

か... 年...
か... 年...

ら... 年...
ら... 年...

思... 年...
思... 年...

古今和歌集卷第二十
大昇所行方

おやかほひのこ

新しき本の姓のうらやまの年をOmote no mi

日記のうらやまの年をOmote no mi

おほふくまのうらやま

おほふくまのうらやまのうらやまのうらやま

あふくまのうらやま

あふくまのうらやまのうらやまのうらやま

あふくまのうらやま

あふくまのうらやまのうらやまのうらやま

あふくまのうらやま

あふくまのうらやまのうらやまのうらやま

神のうらやま

あふくまのうらやま

神のうらやまのうらやまのうらやまのうらやま

あふくまのうらやまのうらやまのうらやま

あふくまのうらやまのうらやまのうらやま

あふくまのうらやまのうらやまのうらやま

あふくまのうらやまのうらやまのうらやま

あふくまのうらやま

あふくまのうらやまのうらやまのうらやま

あふくまのうらやま

あふくまのうらやまのうらやまのうらやま

あふくまのうらやまのうらやまのうらやま

あふくまのうらやまのうらやまのうらやま

あふくまのうらやまのうらやまのうらやま

二上りいりのみしつしつらゆられらふ入さす
 女流くちまきみれぬ川を流れて君よつる人かびりんよ
 くれえ慶の門へ入ぬくう
 君よけかかちりもどけかかぬぬれらぬのしくまきしんか
 うとに仁和のにのいされらぬのまき

人付のくあわし

わさのや後れ山とそくあさうひくそんやあきあき
 くれき今とれ口ひのあわぬき

東遊
みちくし

わさくちまきしつらゆらぬの君よつる人かびりんよ
 くれえ慶の門へ入ぬくう
 君よけかかちりもどけかかぬぬれらぬのしくまきしんか
 うとに仁和のにのいされらぬのまき

今かかちまきしつらゆらぬの君よつる人かびりんよ
 くれえ慶の門へ入ぬくう
 君よけかかちりもどけかかぬぬれらぬのしくまきしんか
 うとに仁和のにのいされらぬのまき

今かかちまきしつらゆらぬの君よつる人かびりんよ
 くれえ慶の門へ入ぬくう
 君よけかかちりもどけかかぬぬれらぬのしくまきしんか
 うとに仁和のにのいされらぬのまき

今かかちまきしつらゆらぬの君よつる人かびりんよ
 くれえ慶の門へ入ぬくう
 君よけかかちりもどけかかぬぬれらぬのしくまきしんか
 うとに仁和のにのいされらぬのまき

今かかちまきしつらゆらぬの君よつる人かびりんよ
 くれえ慶の門へ入ぬくう
 君よけかかちりもどけかかぬぬれらぬのしくまきしんか
 うとに仁和のにのいされらぬのまき

今かかちまきしつらゆらぬの君よつる人かびりんよ
 くれえ慶の門へ入ぬくう
 君よけかかちりもどけかかぬぬれらぬのしくまきしんか
 うとに仁和のにのいされらぬのまき

いふ所の人の氣がわらわらうのちよた人歌
を

山を氣おの籠のよふ人乃ち起く歌いひやと
巻第ナ四

いふ所の人の氣がわらわらうのちよた人歌

とやとらひひれ日らわくみよとしそれ

ワラとくくしひかほらふらふれよとひさ

源兼光の歌

けらひ

ふらふにひひしよふらふれよとひさ

あつたれ

古今和歌集序

紀洪室

夫和歌者託其根於心地發其花於詞林者也
人之在世不能無為思慮甚遠表榮相愛
感生於志詠形於言是以逸者其有玉然者
其吟悲可以述懷可以發憤動天地感鬼神
化人倫和夫婦莫宜於和歌倭語有古義一
曰風二曰賦三曰比四曰興五曰雜六曰頌
若夫春寫之晴花中秋蟬之吟樹上雖無曲
折各發秋謹物皆有之自然之理也然而神
世七代時質人淳情欲無不和歌未作還干
素盡鳥子到出空國始有三十一字之條今
及方之化也其後雖天神之弦海童之女莫
不以和歌通情者及人代此風大起長歌

短哥梳頭混中之類雖非一源流漸整
於拂雪之樹生自寸苗之煙浮天之彼起於
一滴之露正如雅波律之什缺
天皇富緒川之篇在子或事開神異或具入
幽玄但見上六哥多存古質之語未為耳目
之恍惚為發誠之端古
天子每辰夏景詔侍臣於寢道者缺和歌君
臣之信由斯可見賢愚之性於是相分取以
隨民之欲擇士之才也且大津皇子之初作
詩賦詞人乃子慕凡繼塵移波漢家之字化
我日域之俗氏業一改和歌漸衰然於今之
師枿不古史者高振神妙之思拙步古今之
間有山也亦人者並和歌仙也其修業和歌

者綿之石施及彼時名流播人貴奢淫浮詞
之具勢流泉涌其實皆落其花孤榮也其好
色之家以中為對鳥之使乞食之客以什為
活斗之福故半為婦人古非建古史之前
近代存古風者終二三人然長短不同論以
少弁起山僧正心得歌折然之詞花而少者
如畫畫好女流執人信在息中將之於其情
有餘之詞不足如善心雖少彩色而有其音
文琳巧詠物如其新近俗如賈人之意鮮衣
字治山僧長撰之詞花麗而首元浮澤如皇
秋月遇曉雪小野小町之秋古衣通作之流
也然於而無氣力如病婦之惡花於大友黑
主之於古猿丸大友之息也頗有逸興而新

甚鄙如田父之息花亦也試外氏姓德國者
不可勝數其大底皆以苑為基不知苑之趣
者也俗人爭事榮利不用詠和歌也或
雖貴兼相將家能全抄而肯未腐出中名先
賦世世上適為後世效者唯和歌之人而
已何者語近人耳義慣神心也昔平城
天子拓傳信之撰萬葉集自余以來時歷十
代教過百年其後和亦弃不效採雅風流如
聖宰相輝情如在仙云而皆以他方圖不以
斯道歌
階下御宇今九載仁流輝津洲之外惠茂
筑波山之垣側爰為漸々步常々用口抄長
為最之頌洋洋滿耳思繼既絕々風歌其久

廢之道安紹大内記紀友則濟書所次紀貫
之前甲斐少目九河内初垣右衛門府生士
生忠岑本各款家集并古來舊款曰續萬葉
集也其是皇多詔部類所存之方勅為二十卷
名曰古今和歌集其詞少去形之類名類
秋夜之長況哉進恐時俗之嘲退悲々流之
拙適遇和歌之中具以示吾乃之再昌嘆乎
人凡沈没和歌不在斯式于時延喜五年歲
次乙丑四月十八日片貫之等謹序

天和三癸亥年正月吉辰

九原源吾集
階下二條守所
養至五平次
新刊

天味三
...

入...
...

